

戦後木造モダニズム建築としての 八幡浜市立日土小学校の保存と持続的活用

曲田清維（愛媛大学教授） 花田佳明（神戸芸術工科大学教授） 和田耕一（和田建築設計工房 主宰）
武智和臣（ATELIER A&A 主宰） 腰原幹雄（東京大学生産技術研究所教授） 梶本教仁（八幡浜市教育委員会）



竣工当初の川側外観（1958年）

概要
愛媛県八幡浜市は佐多岬半島の根本にある港町である。八幡浜市立日土小学校は、その中心部から北へ数キロ行った山間の集落にあり、敷地の横を流れる喜木川に身を寄せようように建っている。この校舎は、同市の職員であった建築家・松村正恒（1913-93年）の設計により、1956年から58年にかけて完成した。卓越した建築計画がなされると同時に詩情溢れるたたずまいも印象的で、建築研究者と建築ジャーナリズム双方から高く評価された。

しかし時間の経過とともに日土小学校について語られる機会は減り、また松村も建築界の最前線からは次第に消えていった。ところが1990年代以降のモダニズム建築再評価の動きの中、日土小学校は、1999年、DOCOMOMO Japanによって日本を代表する20のモダニズム建築のひとつに選ばれ再び注目を集めた。

本プロジェクトは、日土小学校の価値を認め、保存運動をリードし、行政や市民との間の複雑な関係を調整し、詳細な現況調査に基づき実施設計をまとめ、2009年6月に保存再生工事を完成させることによってこの建物の持続的な活用を可能にしたものである。

日土小学校の価値
日土小学校は切妻屋根の木造2階建て、運動場から見て右側が中校舎（1956年竣工）で左側が東校舎（1958年竣工）である。前者には、職員室・工作室・音楽室・2つの普通教室、後者には6つの普通教室と便所があった。日土小学校にはいくつもの建築的特徴がある。

まずは、教室と廊下を分離したクラスター型教室配置であることだ。それにより、落ち着いた学習環境だけでなく、廊下側と運動場側双方から教室に光と風を入り入れる両面採光が実現した。教室に照明設備が十分ではなかった戦後間もない時期において、それはきわめて切実かつ先駆的な建築計画であった。

木造とスチールを組み合わせたハイブリッドな構造形式も効果的に使われている。たとえば東校舎では、丸鋼ブレースで水平力に抗することによって川側の外壁をカーテンウォール化し、開放的な外観と教室空間を実現した。戦後においてなお大型木造建築の可能性を探った希有な事例といえる。

さらに、階段、廊下、図書室、川側のテラスや外部階段などのデザインは細部に至るまで考え抜かれており、現代においてすら類を見ない豊かさを持っている。学校内のすべての空間が、子どもたちのための心地よい居場所なのだ。

松村正恒という建築家
松村正恒は、1913年、現在の愛媛県大洲市新谷町の旧家に生まれた。1935年に武蔵高等工科大学（現・東京都市大学）を卒業後、恩師蔵田周忠の勧めで土浦電機建築設計事務所に入職し、1939年からは満洲に移転した同事務所にて植民地生活も経験した。

一方、国内外の最新の建築計画の知識を独学し、『国際建築』で海外文献の翻訳をしたり、弱者救済の社会活動にも参加した。1941年には農地開発営団へ移り、農村の住宅調査に従事した。こうした学習や経験は全て、戦後における八幡浜市役所での活動の糧となった。

終戦とともに故郷の大洲市へ戻り、1947年に八幡浜市役所に奉職した。市役所での活躍はめざましく、1960年に退職するまでの約13年間に、多くの秀れた学校建築や病院関連施設を設計した。

建築雑誌や『建築学大系』などに作品が紹介され、1960年には、『文藝春秋』で日本を代表する10人の建築家のひとりに選ばれた。1960年に八幡浜市役所を辞し、松山市に設計事務所を開設した。1993年に亡くなる直前まで現役を貫き、大小合わせて約400もの建物を設計した。書や狂言を愛し、近代建築の保存運動にも尽力した。



日土小学校の鉄骨階段に立つ松村正恒（1960年、撮影：渡辺義雄）



図書コーナーとしての階段室



オープンタイプの普通教室と多目的コーナー（新校舎）

■保存再生計画の基本方針

日土小学校の保存再生計画の立案に当たり、最大の課題は、行政と市民の意向を反映した上で、同校の文化財的価値を守りながら現役の小学校としての機能や建築基準法による規制を満たすことであった。その主な基本方針は以下の通りである。

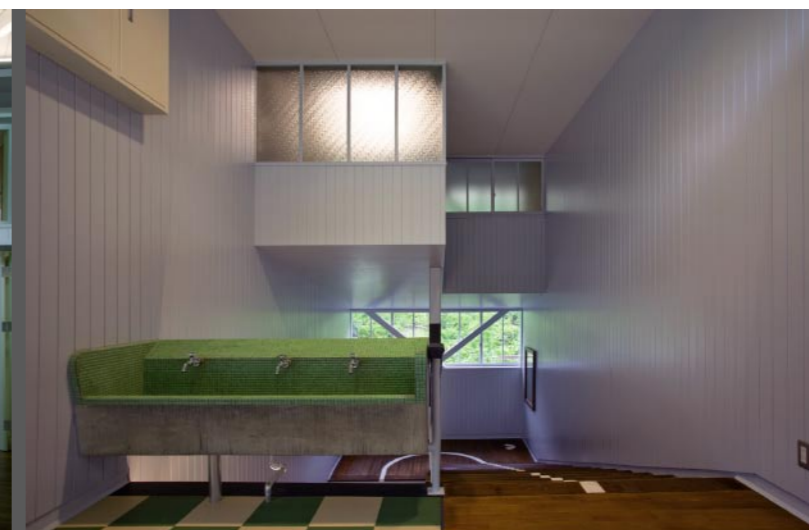
- (1) 文化財としての価値を尊重し、基本的に当初の状態に戻す。
- (2) 構造補強をおこない、現行の建築基準法以上の耐震性能を確保する。
- (3) 床の遮音性の向上、建具の改良、便所の更新など、各所の機能性を高める。
- (4) 中校舎の職員室まわりは改修し、運動場への見通しを確保する。
- (5) 中校舎の特別教室を改修し2つの普通教室とする。
- (6) 東校舎の普通教室の意匠は当初の状態に戻すが、実験台や調理台などを設置して特別教室に変える。
- (7) 新校舎を建設し現代的な学習環境としての普通教室とする。



職員室前のオープンタイプの交流ラウンジ



視認性を重視した職員室



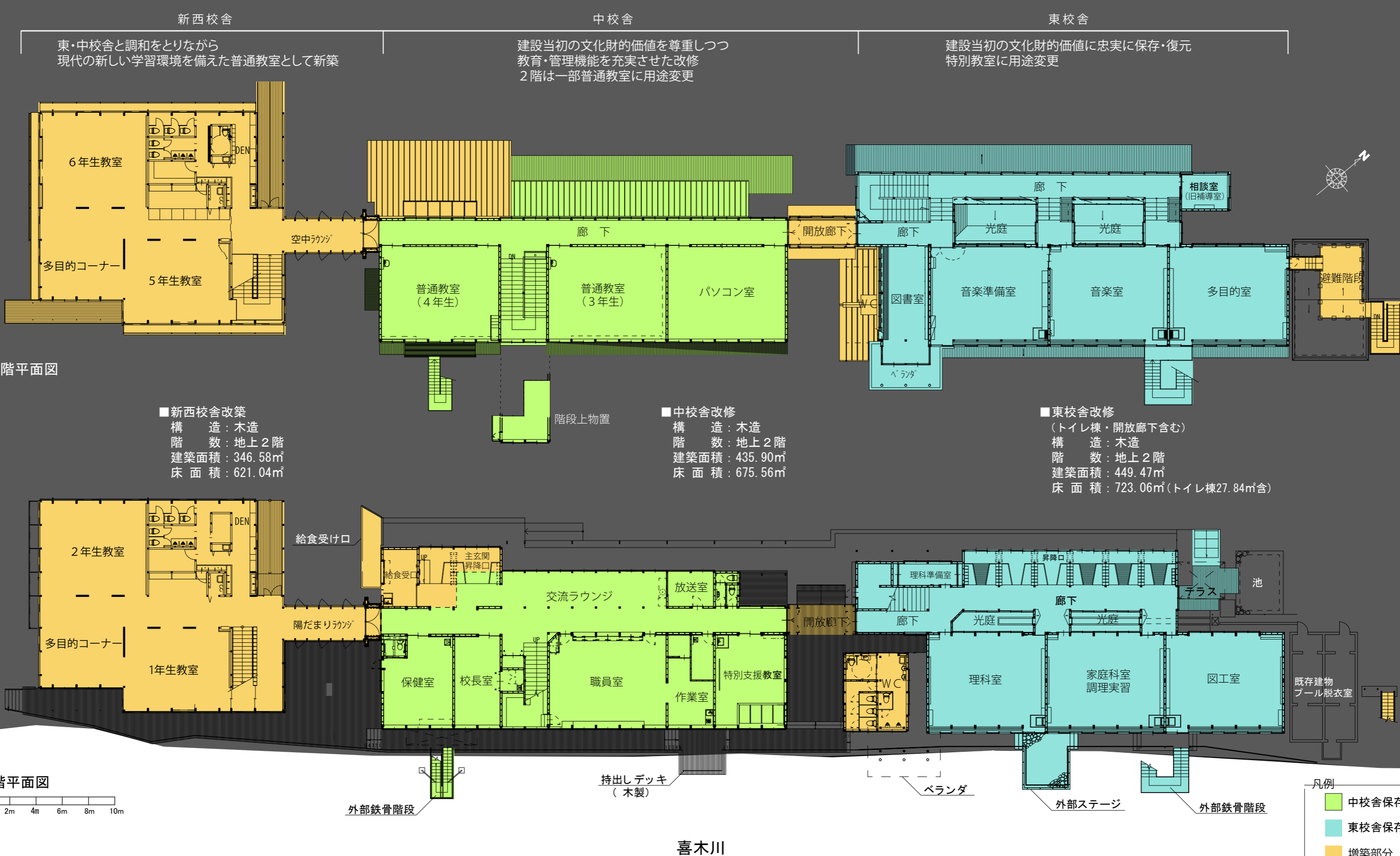
中2階にある階段室（中校舎）



竹の柱座標線や鉄筋の本線を復元した図書室



光天井を復元した昇降口（東校舎）



当初の姿に補修した鉄骨階段（中校舎）



安全のため手摺を新たに設置した図書室ベランダと外部ステージ（東校舎）